

国宝高松塚古墳壁画修理後の保存に係る 古墳に戻す場合と戻さない場合の比較（案）

1. 石室解体時の保存方針

平成17年6月27日の国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策検討会において決定された国宝高松塚古墳壁画の恒久保存方針等は以下のとおり。

1. 恒久保存方針

古墳から石室を取り出して、「解体修理」を行うこと。

- （1）石室ごと壁画を古墳から取り出す。
- （2）取り出した石室を適切な施設において、壁画及び石材の修理を含めた保存措置を施す。
- （3）将来的には、カビ等の影響を受けない環境を確保し、古墳に戻す。

（中略）

5. 恒久保存工程

壁画の修理及び保存処理が終了した後、カビ等の影響を受けない環境を確保した上で、古墳に戻すこととする。具体的な内容は、壁画の修理及び保存処理工程の段階で壁画の状況を勘案しつつ、検討会において検討を行うこととする。

2. 高松塚古墳壁画修理後の当分の間の保存の在り方について

高松塚古墳壁画修理後の当分の間の保存の在り方について、以下のそれぞれの観点から、これまでの議論を整理すると以下のとおり。

①壁画の保存

（ア）カビ等の生物被害

古墳に戻す場合	古墳に戻さない場合
○カビ等の生物被害が進む可能性が高く、点検は容易にできないケースも考えられる。 ○石室内の温湿度管理を適切に行うための有効策が現時点であるとは言い難い。	○温湿度が制御された環境下で、カビ等の生物被害の影響を抑えながら管理することが可能。

(イ) 漆喰^{しっくい}の劣化

古墳に戻す場合	古墳に戻さない場合
○天井などは古墳に戻すと漆喰が落ちる心配がある。 ○地震によりひび割れや剥落^{はくらく}が起きる可能性がある。	○漆喰の状態を常に監視でき、必要な修復を行うことが可能。 ○博物館環境で保存することで、漆喰の剥落を食い止めることが可能。

②石室石材の保存

(ア) 石材の強度

古墳に戻す場合	古墳に戻さない場合
○石材の劣化やひび割れが見られるため、石室の形に組み立てられない可能性がある。 ○地震等があった際に更にひび割れ等を引き起こす可能性がある。	○石材のもろさやひび割れを考慮した保存を行うことが可能。

(イ) 構造体としての石室の強度

古墳に戻す場合	古墳に戻さない場合
○16枚の石材を組み直して置くとすると、地震等があった際に石が倒れる危険性がある。	○地震等により石が倒れないような対策をとることが可能。構造体を作らず平置きして保存することも可能。

③墳丘の保存

(ア) 整備

古墳に戻す場合	古墳に戻さない場合
○地震等による地割れ等から侵入する水や生物への対策が課題。 ○保存施設及びその出入口などを墳丘部に設ける必要性が生じ、外観を本来的な形状には復元できない。	○現在の仮整備の扱いについて検討する必要がある。

(イ) 古墳に戻す場合の保存施設

古墳に戻す場合	古墳に戻さない場合
○墳丘上に保存施設を設置する必要がある、墳丘の外観に影響が及ぶ。 ○生物被害の防止策など古墳保存するための有効な対策が現時点で見つかっていない。	○墳丘上に保存施設を設置しないため、墳丘の外観を活かすことができる。

④壁画の公開活用

古墳に戻す場合	古墳に戻さない場合
○壁画の公開はできない又は極めて限定的になる可能性が高い。	○平置き等の方法により安全に公開することが可能。 ○実物を広く公開することが可能。 ○実物を見ることで今後の研究の進展も期待できる。

⑤壁画と古墳の関係

古墳に戻す場合	古墳に戻さない場合
○古墳と壁画との一体性を確保することができる。	○古墳と壁画との一体性を確保することができない。